

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗

五洋建設株式会社 東京土木支店

工事所長 **吉田 慶太**

2002(平成14)年、五洋建設株式会社に入社。以来、シンガポールやドバイ、ベトナムなどの護岸工事、棧橋工事を経験し、2009(平成21)年から現在に至る。



情報を収集し、現実を見据えた施工計画を

私にとって「かけだし」というのは、現場で自ら考えて行動するようになった頃だと捉えています。そのかけだし時代に経験した大きな失敗は2度あります。

最初は入社7年目、南ベトナムでコンテナターミナルの建設工事に従事していた時のことです。私は海上棧橋部分を担当していたのですが、工事も佳境に差し掛かり、スラブコンクリート打設の1回目を行っていたところ、突然のスコールに襲われました。もちろん、スコールに備えブルーシートなどを準備していましたが、具体的な手順までは考えていなかったため、必死にシートを広げたものの打設面は多くの足跡や雨の跡によって補修が必要な結果となってしまいました。計画を立てる段階で、スコール対策を具体的に詰めていなかったこと、当該打設面積をカバーする雨養生の実績もなかったことが失敗を招いてしまったと分析し、以後はスコールが発生しにくい夜間にも作業をしたり、ブルーシートを敷く際に使う足場を設置したりするなどの対策を講じました。その結果、2回目以降は失敗することなく、工事を完了することができました。

2度目の失敗は、日本に戻ってきた入社9年目。伊豆諸島にある漁港工事に監理技術者として従事していた時のことです。直立消波ブロック据付作業で失敗をしました。「据付ものは施工延長が伸びる」という慣例に惑わされ、目地間隔の管理を怠り、結果として延長不足が発生

してしまいました。法線出入りや天端高といった管理はしっかりと行っていたのですが、施工延長については最後に確認すればよいだろうと、確認作業を後回しにしてしまいました。こうした思い込みや「大丈夫だろう」という根拠のない自信が結果的に余計な作業を生んでしまいました。

今思えばこの2つの失敗は、計画と現場管理の詰め甘さが原因であると考えています。ベトナムでは、現場の環境などの情報が不足していたこともあり、計画にスコールの具体的な対策まで明記することができませんでした。伊豆諸島では、「大丈夫だろう」という自信が現場管理を甘くしてしまったと分析しています。しっかりと情報を収集し、実際の現場で作業するという現実を見据えたうえで、さまざまな角度から計画を立てることが重要です。ただし、その計画が完璧であるとは限りません。計画の欠点を限りなくゼロに近づけることが工事の成功につながると確信しています。

また、実際に工事現場に入ったらその計画に沿いつつ、設計図の意味を理解し、設計寸法どおり、もしくは定められた許容範囲内で物を造ることが大切だと学びました。当たり前のことかもしれませんが、その当たり前を愚直に行う。この思いは今も変わらずに持ち続けています。常にかけだしの頃の気持ちを忘れず、社会に少しでも貢献する技術者となるべく日々愚直に努力していきましょう。